

思い出

クラウン

思い出

たった一度だけで構わないから、あの階段を駆け上ってみたいのです。

この部屋にはたまにオトモダチが入ることがありますが、すぐにいなくなってしまう。すっかり慣れてしまいましたけれど、寂しいと思うことはあるのです。この部屋の窓から見える、切り取られた景色の中の運動場を駆け回る子達を見た時とか、熱に浮かされながら耳に届く歓声を聞いた時など。

お外はとても明るいのです。電球の明かりとはまるで違う、透き通った明るさに焦がれます。

詰っても詮無いことですし、嘆いてもなにも変わりません。それでも少し夢を見たくなるのです。

お母様は私が大きくなったら、ひとりで歩けるようになるとおっしゃっていたけれど、本当なのかしら。私よりも小さなオトモダチだって自分の足でしゃんと立って歩いているのですよ。お母様のことは大好きですし、心からの信頼を持っておりますけれど、時には揺らぐことがあっても良いと思うようになりましたの。

ええそう。新しいお友達ができました。

ハヤト君というお名前で、凛々しい眉に黒曜石のような瞳の少年です。私と同じ年くらいかしら。

ハヤト君はかけっこで一等をとったことがあるのですって。羨ましいわ。思いっきり走ると、息が苦しいのだそうです。お熱が出たときと同じでしょうか。ハヤト君も以前はこの部屋に居たそうですけれど、今は苦しくないのですって。きっと丈夫になったのですね。

彼はあすこの窓から、たまに遊びに来てくれるのです。

あら、夢じゃありません。ちゃあんとこの目で見たのですから。

ここは学校も併設されているでしょう。運動場はすぐそこですもの。少し足を延ばしたらここに来られるそうです。私もいつか学校に通えるのかしら。

分かっています、先生のお許しが頂けたら、ですね。

それでね、ハヤト君の話を聞きましたの。屋上まで行ったら、とても風が気持ち良いそうです。この部屋の窓から見る景色よりも、ずっとずっと見晴らしが良いのですって。でも、本当は入ってはいけない場所だから、見つかったら婦長さんに怒られてしまうの。一度で良いから、怒られてみたいわ。

そういえば、お兄様の名前はハヤトでしたね。天国でお元気になさっているのかしら。考えてみたらお若い頃のお兄様とハヤト君は、面差しがよく似ている気がします。とても不思議ですね。

ご気分が優れないのですか。先生をお呼びしましょうか。

まあ、泣いてらっしゃるの。